

# ライフヒストリー

年齢	立場	ヒストリー・エピソード	満足度
23	小学校教員になる	教育学部卒業は、教員になるのが当たり前の時代。 松本の小学校に赴任。小1の学級担任。 学年の先生方の支援や教育実習(小3担当)の経験をもとに勤めた。	○
24	結婚 長女誕生	2年目の春 結婚。 長野市の小学校に転任。その年に長女出産 主人の家族と同居していたので、子供の世話をすべてお願いした。義母は50歳代であったことや経済的な理由もあり、産後8週間での復帰を選択した。小学校だったので、帰りが遅くなることも少なく、忙しさや大変さを感じる間もなく 過ごしていた。	○
31	小学校教員	長男出産 産後8週間で職場復帰 小学校家庭科専科	○
32	小学校教員	乳腺に腫瘍が見つかり、手術で撤去。 その後悪性とわかり、信大病院で放射線治療。2か月の休職。	○
34	中学校教員	当時中学校は、男性教員が8割以上。家庭科主任・給食係・生徒指導・総合的な学習係などが主な校務分掌だった。 仕事内容に男女差はなかった。当初は「セクハラ的な発言」や「女だから主任はやらせない」等の事は見られたが、気に留める事もなかった。また、お茶入れ的な仕事もしたが、サービスであり、仕事とは思っていなかった。部活もそれなりに配慮があり、休日出勤も少なかった。 教師3分の1 母3分の1 家庭人3分の1と割り切り、その時にやることに全力であたった。 「仕事は家に持ち帰らない」ではなく、持ち帰ってもやる時間はなし。職場で、短い時間を見つけて集中するようになっていった。また、家庭で何があるかがわからない。仕事の仕上がりは早めにするようにしていた。 後半になり、子供たちが手が離れたころは、教科研究や部活動、生徒指導等 時間を気にせずに行えるようになった。しかし学校の仕事はできるだけ能率的な行い、趣味の時間を作り出していた。	○

36	中学校教員	義父と主人が経営していた会社が倒産。 長野市地附山地すべりにより自宅が埋没。	○
37	中学校教員	現住所に、家を買って居住。 長女の病気(モヤモヤ病)が発覚。手術、入院を繰り返すが、後遺症が残る。 授業があり、いろいろな業務を背負っての職業。責任もあり、何があっても、仕事はやるしかない と思っていた。 家族や実家の父母の協力があり、仕事に支障が出ることはなかった。	○
53	管理職になる	教頭として3年 校長として5年務めた。気持ちの持ち方は、それまでと変わりなかったように思 う。生徒の立場を考えるとともに、先生方の立場(家庭・部活・将来的なこと等)を考えあわせるこ とになった。 中学校の女性管理職は、少なかったが、特に意識したこともなく、仕事内容にも変わりはなかつ た。	○
60	退職	2011・3・31の12時、肩の荷がおりた。意識はしていなかったが、力をいれて生活していたことを実 感した。 責任をとることが終わったと思った。	○
60	再就職	教職関係の外部団体に所属。銀行での仕事を選んだ。 学校とは全く違う世界を知ったことは、人に接する目が変わったように思う。 教員というのは、しっかりと守られた世界で仕事をしていたことを感じた。	○
65	家庭に入る	1週間に1回公民館の成人学校での講師。 健康維持のための筋トレ週2回30分程度。 年寄りの手習いで、マンドリンと日本刺繍。 時間に追われた生活から一変、自分の時間を楽しんでいる。 孫の世話は、自分でしなかった育児の勉強になり、ゆったりと子どもの成長をみていることができ る。	○

趣味について

大学の頃より、針仕事が好きだった。教材を作ったり、子どもの洋服を作ったり、自分の着るものを作ったりと。  
教員時代 嫌なことがあっても、「ミシンを踏む」と心が落ち着いた。退職後は、洋裁に加え、実母、義母の着物を作りなおして着たり、洋服にリフォームしたりすることもある。自分にとって、現職時代から、生涯かわれることを見つけられていた事は、よかった。「仕事が趣味」には疑問を感じる。何かひとつ気持ちを入れられること(趣味?)を持っている事が、仕事に余裕ができるのでないだろうか